

小中連携と「学びのIn・About・For」

上越教育大学大学院 木村吉彦

《ポイント》

一連の学習の流れを象徴するのが「In・About・For」である。

一方、「In・About・For」は、子どもの発達段階に見合った、その時期に最も大切にしなければならない活動内容とそこで育てたい資質・能力を象徴するものでもある。

はじめに

異校種間連携においてもっとも大切な発想は、子どもの学びや育ちを連続的に見取ろうとすることである。私は、子どもの成長を連続的に見ようとするときのヒントとして「学びのIn・About・For」という考え方を提唱してきている。本節では、この「In・About・For」をもとに、子どもの発達段階に応じてその都度大事な活動と育てたい資質能力は何かについて考えていきたい。

「学びのIn・About・For」は、子どもの育ちを全人的に捉える際の有力なヒントである。従って、子どもをトータルに（全人的に）育てようとする幼児教育・生活科・総合的な学習を念頭に置いた発想であることをはじめに断っておく。

1. 学習の流れの象徴としての「In・About・For」

まず、「In・About・For」の語源とその意味するところを示す。「In・About・For」は、もともとイギリスの環境教育の用語である。

In とは、学習対象となる場所そのもの（例えば森）に入り込むことによって、その場所がどういうものであるかを体と諸感覚の全てを使って満喫し、そこでの活動に没頭する活動を象徴している。学習対象であるその場で、森に枯れた部分があること存在に気付かされる。このようなInの活動では、集中力や感性的な課題発見力の育ちが期待できる。

About とは、Inの活動の中で見つけた感性的な課題についてこだわりをもち、その疑問（「どうして所々だけ枯れているの？」）について解決しようとし、さまざまな調べ学習に取り組む活動を象徴している。ここでは、知的な課題発見力（酸性雨）・課題解決力すなわち情報収集力の育ちが期待できる。この情報収集力とは、「（自己の生き方を）考える材料を集める力」を意味する。

Forの活動とは、体験を通して得た実感の伴った問題意識に裏付けられ、自分で集めた情報（考える材料）を駆使して、学習対象に対して自分はどのような貢献ができるかを考える活動の象徴である。例えば、「森のために僕は何かができるのだろうか、何をしなければならないのだろうか」などと考えを進めることである。

このように、「課題を見付ける（In） 情報を集める（About） 何ができるか考える（For）」

という、体験や活動を通して行われる一連の学習の流れを象徴するものとして「In・About・For」がある。ここで大切なことは、感性的な課題発見力・知的な課題発見力・情報収集力など、自分で見付けた課題に対してこだわり、様々な方法を駆使して情報を得ようとする意欲が根底にあって初めて、考えるという活動が成り立ち、様々な問題について考える力が育つということである。活動や体験の中での主体的な課題設定があってこそ、探究的な学習が成り立つのである。

2. 子どもの育ちを連続的に見取り、全人教育につなげるための 「In・About・For」

一方、私は、この「In・About・For」を、子どもの発達段階に見合った、その時期に最も大切にしなければならない活動内容とその発達段階に応じて育てたい資質・能力を象徴するものとしても考えている。幼児期から中学校卒業までを視野に入れ、それぞれの時期に最も大切にしたい活動とそこで育まれる資質・能力を表にしたものを、次頁に載せる。ここには、子どもの学びや育ちを連続的かつ全人的に捉え、目の前にいる子ども（自分が直接受け持っている子ども）だけでなく、子どもたちのこれまでとこれからを強く意識し、しっかりした見通しをもって子どもの教育に当たることの大切さが示されている。

幼児期から中学校期までを視野に入れた「学びのIn・About・For」

＜子どもを 保育（遊び）＞	トータルに（全人的に）捉える保育・教育＞ 生活科	総合的な学習	
In （～の中へ） 没頭する・夢中に ＜自己中心性・直接 ・集中力	About （～について） ・調べる・知る ＜知的な好奇心・ ・こだ なる・浸る 経験・体験を通し ・主体性の育成	For （～のために） ・追究の第一段階 うとする ＜知的な好奇心・ 調べ方・学び方＞ わりを見つける力 情報収集力 た学習＞	誰のために＜他者意識＞ 何のために＜自己の生き 方＞ 追究の第二段階 ・思考力・判断力 行動力
幼 児 期（３歳～） ＝「知性の土台」作り	低 学 年 「わたしは が好きです、得意です」	中 学 年 「わたしは～について知っています」	高 学 年・中 学 生 「わたしは ～についてこう考えます」

それぞれの時期の特徴と In・About・For

幼児期から低学年期：

この時期の自己中心性とは、自分にとって身近なものについてはよく学ぶ（よく覚える・よく身に付ける）という特徴をもっている。従って、自分の好きな遊びや自ら選んだ活動に

「没頭する体験」が重要である。この体験が集中力を生み、人間としての主体性の源を創る。また、この時期の諸感覚をフルに使った活動が感覚（感性）的な課題発見力を育てる。幼児や低学年であっても、遊びの対象や遊び相手へのこだわりはあるし、年長児にもなれば、「年少児のために・赤ちゃんのために何ができるか」（お兄さん・お姉さん意識）をもつので、In を中心としながらも、About・For も意識した保育や学習が必要である。

小学校中学年期：

知的好奇心が旺盛になる時期である。この時期の児童は、自分で興味・関心の対象や課題が発見できる。そこでこだわりを学ぶ。そのこだわりに基づいて、調べ学習を設定する必要がある。この時期の子どもたちは、「おもしろそうだから調べよう」「興味があるから知りたい」と考える時期である。ただし、ここで「社会的な問題意識」のレベルを要求するのは、少し無理があるかも知れない。「追究の第一段階」とは、社会問題よりも自分の興味・関心を大事にした追究でいいのではないかと、という意味である。とにかく、情報収集の体験を多くもつことで、考える材料集めの力を養いたい時期である。

小学校高学年期・中学生期：

私は、For（ために）の思考の中に二つの種類の思考力を見出している。一つは、「誰のために」という他者意識（相手意識）のある思考である。この他者意識のある思考を促すことで社会的な問題意識に裏付けられた学習が可能になる。これが「追究の第二段階」である。もう一つは、「何のために」という自分のやっている活動や学習の意味を問う思考である。これは、「誰のために」も含めて、自己の生き方について考える力につながる。言うまでもなく、この考える力は総合的な学習の究極のねらいとなる思考力である。

さらに言えば、私は、小学校高学年や中学生の総合的な学習においては、考えたことをもとにした判断力（「酸性雨を食い止めるために僕は二酸化炭素をなるべく出さないように生活する」）や、行動力＜広い意味の自己表現力と考えてほしい＞（「近くに移動する時はクルマを出してもらわずに、自転車を使うことにしよう」といった、日常生活に直結する資質・能力も養うように努めなければならない。このように、自我の発達がある程度のレベルにまで達したと考えられる高学年以降では「thinking for ～」から派生して、「judge」と「do」の力まで育てたい。このことは、先にも述べたように、思考力というものがそれだけで意味を成すものではなく、自分の生活行動にまで結びついて初めて意味を成すものであることを示している。これが、活動や体験を通して学習対象とかかわり、思考力を育み、全人的な育ちにまで達することの究極的な意味だと思われる。

小学校高学年や中学生における実際の学習活動においては、調べ活動をはじめに行い、ある程度の基礎知識を得た上で活動（体験）に入ることが多い。これも、発達段階を見据えた学習のあり方として認められてよいであろう。幼児期・低学年期の部分で述べたように、高学年・中学生の学習においても About・For を中心に置いたとしても、やはり In の活動を大事にして確保して欲しい。頭でっかちの学習だけでは、実生活に根ざした探究的な学習（PISA 型学力の育成）は期待できないからである。

このように考えると、学習の流れにおいても、発達段階に即した学習においても、In の学び（感性と身体を通した体験）があって初めて、課題発見と課題解決への意欲がわき、About・For の学びにつながっていくのだと言える。「知性の土台」とは、全人的な人間形成の土台をも意味しているのである。